

MS-2

発達障害のアセスメントに用いる発達検査・知能検査

瀬尾 亜希子

こども発達支援室〇Z

発達障害をもつ子どもの特性を知ることが、その子どもの支援の糸口を見出すために必要である。子どもの特性を知るための一つの方法として発達検査や知能検査が挙げられる。発達障害のアセスメントとして用いる検査は、「同じ年齢の子どもと比べてどの程度発達しているのか」という観点に加え「個人の中で知能領域のバランスが整っているか」を知ることができるものが望ましい。検査で測定された各領域の知能を標準化された数値を用いて比較し、個人間および個人内の知能のバランスを知ることができる検査としてWISC-IVやKABC-IIがある。本セミナーでは発達障害のアセスメントに適した検査の選び方や実施上の留意点、検査結果の解釈を行う際のポイントについて触れる。

検査は、その開発の背景となる学術理論や目的によって客観的な基準として何に対する反応を測定するかが異なるため、多くの種類の検査が存在する。それぞれの知能検査の特性を知り、目的に応じた検査を選んで実施することが必要である。

発達に遅れや偏りを持つ子どもに対して検査を行うことは難しい。被検児の特性に配慮し、検査目的とは異なる要因で検査に躓かないように工夫をする必要がある。

検査結果をどう読み取るかについては、慎重に行う必要がある。検査の理論的背景や統計的根拠に十分精通している者が結果を解釈することが望ましい。来談者の相談内容に沿った解釈を行うことを心掛け、検査結果で示された数値の読み取りに専心するあまり、来談者の相談内容をないがしろにしないよう、主訴に沿った解釈を行うようにする。また、数値だけを見て判断するのではなく、回答の誤答傾向を分析して、「なぜ、その数値になったのか」を慎重に検討する必要がある。